

レポート (博物館教育論)

世界平和の切り札としての博物館

—これからの博物館教育と学芸員の役割—

木場美玖¹⁾

1) 891-0197 鹿兒島市坂之上 8-34-1 鹿兒島国際大学国際文化学部在学

博物館が取り組むべきことの1つに、「社会貢献」というものがある。「社会貢献」とは、「社会の利益に資する行いをする事」である。では、「社会の利益に資する行い」とは一体何なのだろうか。

まず考えつくのは、博物館の得た情報を公表し社会のために役立ててもらおうという行為だ。以前講義の中で、「学問の境界をなくすことが博物館の役目である」という話があった。限られた学問の枠組みの中で考えられたものは、限られたものにしかなりえない。そこで博物館は橋渡的な役割を担い、対象をもっと広い視野で考察させる。博物館で展示されているものの多くは、あらゆる学問の力を結集して生み出した知の結晶のようなものだ。展示された結晶はまた新たな成果を生み出すために役立てられ、その可能性を広げていく。

さらに、「どのように知の結晶を生み出すのか」という過程を地域でのフィールドワークという形で展示することで、優秀な人材の育成が期待できる。このようなフィールドワークを、私は「生きた展示」と考える。博物館において、知の結晶そのものだけではなく、それを生成する過程も非常に重要である。「ミュージアム」という言葉には「共に学ぶ・議論する」という意味も込められている。博物館はただ結晶を陳列する場なのではなく、生きた人間が共に学びあう場なのだ。

博物館、と言われて普通の人は何をイメージするのだろうか。立派な建物や、どこか荘厳な雰囲気、高価そうなガラスケースにお澄まし顔で並ぶ展示物や小難しい説明文—といったものなのではないか。少なくとも私はそうであった。博物館に足を運ぶことは決して嫌いではない。自分の知りえなかったものを目にするのはとても楽しい。しかし、遥か昔の自分とは別世界の物を見ているという感覚がどうしても拭えなかった。おそらく、それを発見したという驚き

や興奮が伝わってこないからなのだろう。展示物を発見したのは自分ではないのだからそれは当たり前かもしれないが、感情があまりにも抜け落ちすぎてしまっているように感じるのだ。展示物の感情の欠落を招いてしまったのは、無機質すぎる「入れ物」の仕業に他ならない。展示物を綺麗に陳列することを全て否定するわけではないが、果たしてその方法は本当に正しいのだろうか。現在、多くの博物館の来館者数は減少の傾向にある。綺麗に整えることで、人々の興味を引くことは難しいのではないか。

私は、これからの博物館は「生きた展示」にもっと取り組んでいくべきなのではないかと考えている。博物館には立派な建物もガラスケースもいらない、というのが持論である。大切なのは展示物なのであり、入れ物ではない。入れ物を立派にしたところで最初は人の目を引くことができるかもしれないが、いつかは飽きる。きちんと展示物の本質に目を向かせることが必要なのだ。博物館はいよいよ外見を取り繕うだけでは人々を騙せなくなってきたのである。知の結晶を磨き、本質を見せることに力を注がなければならない。そこで、「生きた展示」というキーワードが重要になってくるのだ。「生きた展示」の方法は何もフィールドワークだけではない。博物館から学芸員が飛び出すのではなく、博物館の余計な入れ物を取っ払ってしまうのだ。それが所謂エコミュージアムだと私は考える。エコミュージアムは「生きた展示」の理想形に近づこうとしている。豊かな自然や文化が生きているフィールドを舞台とし、展示物はようやく本来の姿で生き生きと社会に貢献することができる。感情を取り戻した展示物は知の結晶の連鎖を生み、遠のいてしまった来館者を呼び戻すことができる力を秘めているはずだ。

さて、その「生きた展示」の傍らで学芸員は一体どのように学びの手助けをしていけばよいのだろうか。私は、学芸員もまた本来のあるべき姿を取り戻すべきなのではない

かと感じている。その本来の姿とは、「語り部」である。従来の学芸員はいくら展示へ貢献していても、多くの来館者にとっては小難しい説明文の添え物のような扱いであった。しかしエコミュージアムという場で、彼らも息を吹き返すだろう。エコミュージアムでは小難しい説明文は取り払われているため、来館者にとって学芸員が展示物との唯一の橋渡し役になる。つまり、来館者が展示物の本質を見極めるためのただ一つの足掛かりなのだ。社会貢献が正しく行われるかどうかは、学芸員にかかっているといっても過言ではない。

しかしこれは、添え物的な役割から彼らが解放されることも意味している。大きな責任を負うのと同時にある種の自由を手に入れたのだ。学芸員は今こそ自らの殻を打ち破り、「語り部」として堂々と生きるべきだと思う。ここで、「教育とは何か」をしっかりと自分の中で追求していく必要がある。教育とは相手に知識を押し付けるのではなく、相手と共に学びながらお互いを高めあっていくことだ。お互いの向上のためには単なる知識の積み重ねではなく、人間的な資質も問われる。これからの学芸員の育成にはもっと人間的な成長を促すような工夫が大切になる。自分も成長しながら人を成長させることのできるような人材育成には、やはり博物館の力が必要だ。博物館が学芸員を育て、学芸員もまた博物館を育てる。このような良きサイクルを作るためにも、「生きた展示」を広めなければならない。子が親に似るように、教育された者はその教育者に似る。従来の無機質な展示方法では、無機質な学芸員になってしまう。「生きた展示」による生き生きとした学芸員が生まれたとき、来館者は説明という名の語りの中に、展示物の本質を見出すだろう。

博物館という場は、もっとも教育に適した場であると言える。今や博物館はフィールドワークからエコミュージアムという広がりを見せ、知の結晶は世界中に散らばろうとしている。この広がりが社会貢献という枠組みを超え、いずれは世界貢献という域に達することを願っている。立派な建物やガラスケースという入れ物から抜け出し、生きたフィールドへと躍進した知の結晶は、地球という大きな一つの生命体の中で輝くだろう。博物館の役割が学問の境界をなくすことであったように、私たちは知の結晶を手の内にする境界を取り除かなければならない。世界には博物館はおろか、最低限の教育すら受けられない人々が大勢存在している。地球そのものを博物館にしまえば、そういっ

た格差を縮めていくことができるのではないだろうか。

教育は人の心を豊かにし、やがて社会の利益になっていく。「社会の利益に資する行い」とは平等な教育の輪を広げていくことでもある。今や博物館は単なる学びの手段ではなく、世界平和への切り札となり得た。学芸員は一人の人間として、尽力しなければならない。それは来館者も同じである。私たち人類は共に学び合うことで、貢献していくべきなのだ。「社会貢献」「世界貢献」と言葉にしまうとどこか他人事のように思えてしまうが、これらの行為は自分自身の未来をより良いものにするための行為に他ならない。私たち人類はそれをしっかりと胸に刻み、地球をミュージアムとして高めていく必要があるのだ。人類一人一人が学芸員となり、共同体として学び合うことで新たな高みへと向かうことができると信じている。